

2024 年度  
子ども第三の居場所事業  
報告書

---

フリースクール地球子屋  
拠点名「地球子屋」

作成者 加藤 千尋

作成日 2025 年 3 月 31 日

## はじめに

1996 年にフリースクール地球子屋が開所した当時と、少子化の影響が顕在化している今の状況とでは全く子どもの育つ環境は変わっている。そんな中において当団体も 2022 年から 3 年間、日本財団「子ども第三の居場所事業」助成をいただき、子どもの居場所の意義や役割など実践を通して改めて見つめ直すことができた。改めて日本財団に感謝の意を表する。

現在の日本は、子どもが健全に育つ環境になく、またその状況を改善するだけの力もなくなってきた。その結果として子どもを産み、育てたいという人がいなくなりつつある。高齢人口が社会の 1/3 から 1/4 を占めるようになったこと、賃金上昇が 30 年間抑えられ夫婦ともに働かなければ生活ができない中で、子育てできる時間が限られていること、離婚率が上昇しひとり親世帯が増えたこと、幼児期から子育てにスマホが活用されたこと、発達のバラつきが大きくなり子育てのやり方が難しくなったことなど様々な要因が重層的にある中で地域社会の中で子育て世代が孤立・孤独になっている。子ども第三の居場所事業では、子どもと子育て世代が社会とのつながりをつくることを目的としてきた。

子どもの居場所は、そのような社会的な接点をつくることが難しい保護者や子どもがつながり、相談し、家庭生活と同じような空間ができることで安全・安心感を取り戻し、リアルに人と人とがつながる場所である。

自分をこの広い社会の中のどこに位置付けるか、それが子どもの社会的自立と考えるとき、その手助けもまた子どもの居場所でできることの 1 つであろう。

事業 1 年目は、学校に行けない・行かない子どもの状態について 5 段階評価を作成した。(1 段階「健康度の把握」2 段階「安全安心な状態」3 段階「気持ちの受容」4 段階「自信の回復」5 段階「成長の選択」) 一人ひとりの子どもたちがどの段階か把握し個別の目標として次の段階を目指す取組を行った。

2 年目は、コミュニティモデルとして地域社会とのつながり、様々な人との関わりづくりを重視した。

3 年目は、各家庭と地域社会とをつなげ、子育てで孤立・孤独に陥らない仕組みづくりを意識し、各関係機関との連携を重視した。不登校について子どもに関する行政機関とのつながりができ、今後も有機的なつながりを発展させながら子どもが育つ環境となっていくことが重要と考えている。

この取組をさらに発展させ、持続的な取組にしていくことで、子どもの育つ環境が少しでも改善していくことが今後の課題である。

フリースクール地球子屋  
代表 加藤千尋

この報告書は、3つのパートに分かれている。

1) 居場所活動と子ども達の様子

3ヶ月ごとに居場所内での象徴的な活動を紹介し、その様子を報告している。

2) 子どもたちの変化

居場所に通う子どもたちにどのような変化があったのか、代表的な子どものケースを小学生中学生それぞれ報告している。

3) 保護者、学校との連携

子どもの居場所をつくっていくにあたり、保護者や学校とどのように連携しているのかを簡単に報告している。

この報告書は、当団体の取組の記録として、また子どもの居場所活動をされている団体へのヒントとなることを願って作成いたしました。ご参考になれば幸いである。

## 1) 居場所活動と子ども達の様子

○4月～6月

子どもの居場所「てらこや」を周知するために、熊本市子ども政策課、保健子ども課、教育委員会、子ども若者総合相談センター、教育相談室、児童相談所、子ども発達支援センター、ひきこもり支援センターなど公的関連機関、支援機関へ連携・協力を要請するため子ども募集チラシへ配布した。

子どもたちは、前年度から引き続き来所している子を中心に、新規の子どもたちを受け入れ、仲間づくりができるように人間関係づくりのプログラムを中心に展開した。

天気が良い日にみんなで遠足にも出かけることができた

子どもの居場所「てらこや」の特徴は、小学校低学年から高校生までの年齢幅がありつつも、学年ごとにまとまるうことなく1つの兄弟姉妹のように過ごせるところである。また様々な発達課題などがあったり、学校での辛い体験を引きずっていたりと複雑な背景もある子どももいる。

こういった子ども達の特徴として、体調が不安定な子どもや昼夜逆転しがちな子どもがいることから、毎日の健康観察を特に重視している。

健康観察では、体温、体調、朝食・昼食を食べたか、睡眠時刻や時間を細

かくチェックする。その際には1人ひとりに語りかけて顔色や表情を細かく観察する。毎日行うことで、子どものちょっとした心境の変化や体調などに気づくことができる。

この健康観察を行うことで流行性胃腸炎、インフルエンザなど迅速な対応ができた。また心境に寄り添うことで日々の出来事について相談しやすいきっかけになっている。

4月は、「音楽と癒しの居場所 共に生きるを未来へつなぐコンサート」をここプロ音楽教室と共に催した。居場所に通う一部の子どもがホールにてプロの音楽家とともに曲を演奏を披露することができた。

音楽と癒しの居場所  
**共に生きる**  
を未来へつなぐコンサート

フリースクールやオルタナティフスクールに通う生徒たち、音楽好きな子どもたちと大人の共演

控えめな子  
自分に自信がない子  
学校に行けない子も  
そうでない子も

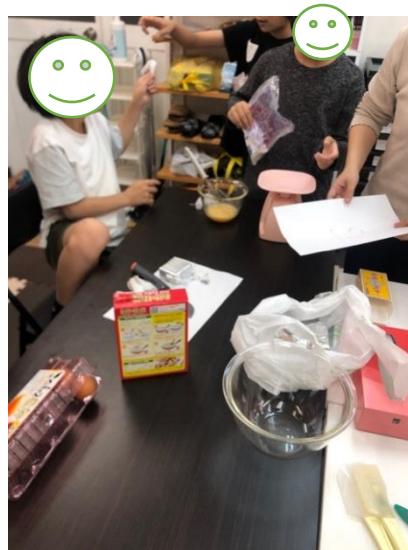
東北四国「共に生きる」と「共につなぐコンサート」

2014年4月20日(土) 21日(日)



5月は、継続した活動をいくつか始めることができた。

楽しく学習習慣を身につけるため、漢字カルタや料理を通して数字に触れるなど体験的な活動を重視した。楽器を使った音楽活動で自己表現する機会を作った。新しい子どもも加わり、地球子屋のことを子どもたちが教え合う場面が多数見られた。子ども同士で教え合うことで居場所感覚は醸成されいくだろう。



手作りおやつ作り

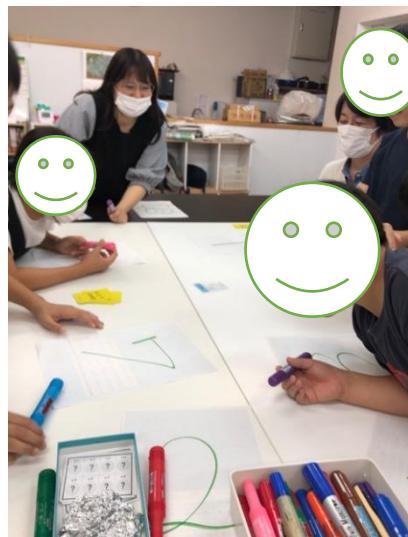


漢字カルタ



音楽活動

○人と人とのつながりは、安全・安心感のあるコミュニケーションから



コミュニケーション活動

4~5月は、新しい子どもを受け入れる時期であり、子ども同士の関係づくりを重視しなければならない。

この時期にしっかりとコミュニケーションをとり、お互いのことを理解

することが居場所感覚を養う上でとても重要である。

現代の子どもは、育つ背景、家庭環境、好みなどバラバラであるからこそ、初対面で何を話してよいか非常に迷うことになる。

子どもの居場所ではこの時期に積極的に共通体験を積み重ねていくことが関係づくりには必要で、共通体験から共通の話題が生まれ、感情をお互いに通わすことができる所以である。

水族館や美術館での見学旅行、レクリエーション、食育、音楽などの体験活動などを取組んだ。



水族館見学



美術館見学

このような体験活動をして、共通体験

をもち、関係づくりを行った後に、しっかりと地球子屋のルールづくりや月予定の話し合い活動などを取り組むことで、この場所が自分たちの意思が反映される場であることを理解した。

そして4、5月の活動を振り返り 6月から少しづつ自分がこの場で何ができるか、またみんなと一緒に何をしたいかなど意見が出すことができるようになっていった。



話し合い活動のアイデア出し



次月の活動予定を話し合う

## ○7月～9月

季節行事には子どもの成長を願うものもあり、大人の思いを子どもに知ってもらうために、また季節の移り変わりを感じ、その季節ごとの過ごし方や生活の工夫などに触れるためにも、地球子屋の飾りつけなどの活動に取り入れている。7月はダイナミックに室内空間を変化させながら、恒例のスイカ割りにトライした。



スイカ割り

7月には梅雨も明け居場所を飛び出して芦北町までレクリエーションスポーツ「ローラーリュージュ」を楽しんだ。

機械を使わず簡単な仕組みで坂を駆け下るスポーツである。ローラーが付いた座席にブレーキシフトが1本あり結構なスピードが出る。普段、不安が強い子どもは最初こそ怖がるもの、やがて慣れていく恐怖心を克服する。

遊びであるが、小さな成功体験を積み重ねることで自分の自信につながっていくものである。

遊園地のジェットコースターとは異なり、自分の力でスピードをコントロールするところに意義がある。子どもたちに大人気であった。



ローラーリュージュ、リフトで上がる



坂ではスピードをコントロールしながら下る

○国旗で世界に关心をもつ  
子どもたちの中には夏休みに生活リズムが崩れて、体調が優れない子どももいる。健康観察を欠かさず行い生活を整える工夫を子どもやご家族に伝えていった。

2学期となり学校に行かない・行けない子どもにとっては学習の遅れが気になってくる時期もある。

8月となり、パリオリンピックが盛り上がりを見せていた。教科書や問題を解くことが勉強と思い込んでいる子どもが多い中、学習の方法は多様にあることに気づいてもらうために、自らの手を動かしながら国旗と国名を覚えることに挑戦した。普段の生活の中とは接点はないが、メディアで取り上げられるこの機会に世界の様々な国について興味をもってもらうために、国旗カードを用意したところ、とても関心をもってくれた。



国旗カード

### ○夏のオモシロ科学実験

また氷蜜の味当て実験を昨年に続いて今年も行った。

自分の味覚という身近なもので行

うこの実験もまた子どもたちの中で大好評である。

目隠しをして氷蜜を食べることで味覚は視覚の影響を受けていることに気がつくことができる。

私たちは、感覚を総合的にとらえて判断をしているのである。

このような取組から科学のオモシロさや不思議さに気づいていってほしい。



かき氷を削って



目隠しで氷蜜の味を当てる

## ○阿蘇ファームランドで身体を動かす＆動物と触れ合う

阿蘇ファームランドは、身体を思いっきりつかってアスレチックを楽しんだり、体力測定ができたり、動物と触れ合うことができる施設である。



アスレチックに挑む



身体活動の測定

普段なかなか外遊びができない現代の子どもたちにとって楽しみながら身体活動をする機会をいかに作るかは居場所活動の中でも重要な課題である。

阿蘇ファームランドは、健康科学に基づき、楽しく身体活動ができるよかったです。

室内施設では体力測定ができるようになっており、そこでも子どもたちは自分の体力年齢を知り、運動の必要性について実感していた。(多くの子どもが運動不足ぎみであった)

その後、動物との触れ合ふと笑顔になり心が豊かになった。動物の無垢な表情やしぐさが本来の自分を取り戻すきっかけとなるのであろう。



## ○不登校をテーマとした教育委員会と協議、教育長の講演会実施

不登校について教育長と協議する場が設けられた。

また 8/31 はフリースクール団体主催で教育長と語り合う場を開催した。



○10月～12月

実りの秋となり、食育活動から自然とのつながりや食の大切さについて考えるきっかけをつくった。

協力いただいた農園にて、芋堀りの収穫体験を行った。

都市部での生活では普段からなかなか土に触れる機会が少なくなるため貴重な体験となった。



農園での様子  
屋外活動で火起こしから飯盒炊飯



ドライカレーづくり



マンドゥづくり



ハロウィンお菓子づくり



ハロウィン飾りつけ



チームで出店を運営

10月からハロウィンの飾りつけに取組み、いくつか食育体験を通して、ハロウィン当日は出店をつくりみんなで楽しむ計画をした。

体験を積み重ねて、目標をもちプロジェクトを成功する取組ができたことは、子どもにとって自信につながったようであった。

11月となりやっと熊本も過ごしやすくなった。

季節を感じたり、ウォーキングで体力をつくるには良い季節であり熊本城散策へでかけた。



年間を通してバドミントン活動も行っている。

週1回の活動であっても練習を重ねていく中で、上達していく。継続は力なりをいう言葉を実感できる。

実力差はあってもペアゲームであるため誰もが楽しめることも魅力となっている。



バドミントンの様子

12月は、一年の締めくくりとして、ケーキづくりやハンドベルを練習してクリスマス会に向けてプロジェクトを組んだ。



ハンドベル演奏練習



農園活動も定期的に行っており、この時期は、手作りピザを屋外でつくることができた。



ピザづくり

クリスマス会では、全員が協力しハンドベル演奏をすることができた



また何度か練習してきたケーキづくりも成功し、よい思い出になった。



ケーキ作り

## ○1月～3月

1月は恒例となった書初めから始まり、新年ならではの行事に取組んだ。



普段、鉛筆やペンしか使わない子どもたちにとって筆で文字を書くことは馴染みがないが、字はその子の精神状態を表す鏡ともいえるもので、定期的に行っている。

寒くなると外に出歩くことが極端に少なくなる。身体運動に取り組むことは健康増進に不可欠であるため、子どもたちが楽しめる企画として「すばっっちゃ」での体験を取り入れた。



発達に課題のある子どもに対して、個別対応をしている。ある子どもは、音楽ゲームのキャラクターを気にいっていることから、キャラクターのイラストをで遊べる工夫をすると、ごっこ遊びからたくさんの言葉を話せるようになった。



子どもが描いたイラストで物語をつくりごっこ遊び

3月は別れの季節である。  
小学6年生の子どもは、学校へ登校できるようになり、卒業式にも参加することができた。

また子どもの居場所「地球子屋」当初から関わってくれたスタッフが移転のため今月いっぱいとなった。

そこで関わってくれたスタッフに感謝の気持ちを伝える「ありがとうの会」を開催した。

どのような活動をともにしてきたかを映像で振り返り、子どもたちが企画したレクリエーションを行い、感謝の言葉と花束贈呈をした。

毎年恒例となった雛人形の飾りつけもして子どもが健康に育ってほしいという願いを伝えた。



一年を振り返り、自分をつくるものの1つに食があることを繰り返し伝えてきた。

食べ物を通して考える機会をたくさんつくった結果、自然とのつながりを自覚できるようになっていった。魚釣りもその一環としてとらえるこ

とができる。普段は魚は好きではないと言う子どもが、自分が釣った魚は美味しいと食べることにご家族も驚かれたようである。



魚釣りの様子

自分自身から地域の課題として、地域猫の問題を知った子どもたち。保護猫活動をしている猫カフェを訪問して捨て猫の問題についてオーナーの方から話を聞いた。

このように地域の課題を自分事として考えるようになっていったことは子どもたちの大きな成長を感じる。

3年間を通して、自分の事から社会の事に目を向けることができるようになったことは、今後社会へ自立していくときの考えるきっかけとなるだろう。



## 2) 子どもたちの変化

### 小学生ケース1 Hさん

小学校低学年の時に、悪気はないものの気にいらない事などがあると、他人が傷つくことも自分の思ったまま反射的に言ってしまうことで、友だち関係が上手くいかない子であった。

また興味の幅が狭く、ゲーム以外には何もしたがることがないような特性もあった。

地球子屋に来るようになり、最初に興味をもったのは、食育活動であった。自分が食材を切り、調理して食べるという行為から自分にも日常生活の中でゲーム以外にできることがあると気づいたようであった。

その後は、工作についても音楽活動にしてもスポーツにしても、最初からやらないと言う事ではなく、やってみる勇気をもてるようになった。

またこの3年間で少しづつ将来に向けて考えるきっかけができた。異年齢の子どもが集まる地球子屋では、自然に先を歩む子どもの姿を見る能够である。

その結果、学習についても最初は全く興味を示さなかつたが、最近では学習に取組む姿勢を自ら見せてくれていることに成長を感じた。

### 中学生ケース2 Yさん

Yさんは、何人か兄弟姉妹がいる中の間子である。小学校の高学年になって、ずっと家に居てゲームばかりの生活に加え、昼夜逆転となつたことを心配して地球子屋を体験した。

最初数回を体験したものの、継続した利用にはつながらなかった。

その間に一番末の弟も学校に行かなくなり、弟が地球子屋を利用するようになっていったが、Yさんは相変わらず昼夜逆転と朝起きるのが苦手であること、それに体調の不調もよくあつたため、なかなか利用が進まなかつた。

地球子屋に行くと決めるとそれが目標となり昼夜逆転することはなくなり、規則正しい生活ができるようになった。すると体力的な向上もみられた。

祖父さんがバドミントンを教えてくれたことがきっかけで、継続的にバドミントン活動に参加するようになった。

この冬には、祖父とともにバドミントン大会にも出場するほど意欲的になつた。

好転していくと、学習の遅れが気になるようになり、習慣的に学習にも取り組んでくれている。

中学生となり落ち着いて何事にも意欲的となっていき保護者も今後を楽しみにされている。

### 小学生ケース3 Hさん

Hさんは、学校生活の中で何にでも頑張りすぎてしまう性格があり、日々の学校生活に疲れてしまい、地球子屋の利用を決めた。

そして学校に信頼できる大人はいないと不信感をもっていたことも不登校の原因となっていた。

子どもの居場所であること、自分のペースで過ごしてよいことなどがHさんには合つたらしく少しづつ通うようになった。

学校とは距離をとったことで、少しづつ疲労は回復していった。地球子屋でも頑張りすぎる傾向があったために、まずは自分の心に従って、やりたいこと、やりたくない事を決めていいこと、イヤな事はNOと言ってよいことなどを伝えていった。そうすることで自分の意見や気持ちを抑えずに表明してよいことが理解していった。

すると自分がやりたいことが明確になっていき、レジン工作など熱心に取り組むようになっていった。このような経験を重ねていくことで、Hさんの中で以前とは異なる等身大の自分で生活してよいことを学んでいった。

2学期後半からは元気を取り戻し、学校生活をもう一度頑張りたいと意欲的になっていった。

疲れた時には、いつでも地球子屋を利用してよいことを伝え、学校へ復帰できるように学校と連携した。

### 中学生ケース4 Nさん

小学校時のいじめ体験から不登校になったNさんは、小学校高学年から地球子屋を利用するようになった。

いじめから非常に不安が強くもつようになつたが、地球子屋は少人数で安全・安心に居られる居場所であることがわかると、少しづつ来所日数も増えていった。

そんなNさんも5年間過ごして、いじめられた経験もすっかり克服することができた。また中学生となり自分と向き合うことができるようになった。

歌を歌うこと、ダンスすることなど音楽を通して自己表現することが好きなこともわかつてきて、積極的に音楽活動をするようになった。

独学で練習した曲をプロの演奏家とともに演奏する発表会にも参加をして数百名の前で見事に演奏することができた。この経験はとても自分の自信につながつていていたと思う。

自分の意見より周りに合わせてしまう傾向があつたが、自分の意見や気持ちを出してよいことに気づいてくると、自分の方向性について考えるようになっていった。

地球子屋内でも最年長になり、リーダーシップを発揮するようになってきた。今後は、自分の将来に向けて目標を持って取り組んでくれるだろう。今後の成長をみんなで見守っている。

### 3) 保護者、学校との連携

子どもの居場所をつくっていく中で保護者との連携や信頼関係が鍵となると考えている。

特に不登校の子どもたちを中心に受け入れてきた実績がある地球子屋は、子どもだけでなくご家族全体が子どもを理解して、関係を改善していくことを目指している。

保護者に対して、いくつかの支援メニューを用意して取り組んでいる。

#### (1) 不登校学習会

不登校の子どもを理解することは、簡単なことではない。一人ひとりのケースは全く異なっており、他の子どもに当てはまるケースも我が子には通用しないことはざらにある。

そんな背景があるために、理解することは困難を極めるがそんな中においても対応の原理・原則がある。

その原理・原則を地球子屋流子育て術としてテキストにまとめ、学習会を毎月1回開催している。



#### テキスト表紙

子どもがどのような状態にあるかをまず5段階で把握することから始め、各段階において4つのステップを取り組んでいくことで子どもと見方がわかり、その子に応じた対応方法が理解できる構成としている。

6回を1セットとしており、半年間かけて学んでいく。この半年間の間に保護者も試行錯誤をしてみて5段階20ステップを試して、有効性を確認することができる。これまで述べ数百人の保護者の受講があった。

#### (2) ともに育つ親の会

ともに育つ親の会は、地球子屋を利用する子どもの保護者だけでなく、まだ利用に至っていない保護者でも参加できるオープンな会である。

子どもが学校に行けない・行かないという状態になると他の誰かに相談しようにもなかなか周りに理解者はいないものである。子どもだけでなく保護者自身も孤立感を募らせて、親子関係も悪化するのが常である。そんな保護者が集まり、今の出来事や気持ちを率直に共有することで孤独感が解消されることが期待できる。

他の保護者の意見や気持ちを聴くだけでも参考になることがあるし、また自らの誰にも言えないようなことを吐露することで気持ちの整理につながり、子どもと向き合えるようになる。こういった場があることで救われたと保護者のみなさんから好評である。

### (3) 学校との連携

熊本市では、地球子屋を定期的に利用するようになると学校の管理職や担任が訪問して子どもの様子を確認する。子どもが自分のペースで学び成長していることが確認されることで出席の扱いにもなる。

このような流れになったのは 2019 年に文部科学省の方針転換を機に理解を示したからである。

地球子屋も毎月子どもがどのように過ごしたか、何日の利用があったかななど個別に学校へ報告しており、その連携は少しずつ深くなっている。

結果論ではあるが、子どもが自らの学びを選択できるように促した結果として、再び学校へ行きたいと意欲を取り戻し登校にもつながるケースが後を絶たない。（決して再登校することだけを目的にしているわけではない）

一部の学校からは、地球子屋の活動内容を成績評価に反映したいとの提案もあり、きめ細かく学習内容について共有するようになった。

### (4) 教育委員会

子どもの居場所やフリースクールの団体が集まり、「子どもの学びを支える熊本県民の会」を発足、その会を中心にして、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会を中心に、今後もさらなる連携を深めていくことを要望した。

課題として学習指導要録に居場所で行った学習内容を転記できるよう

にするためである。

学習評価があることで、学校の通知表に成績を掲載することができる。その是非についてはまだ議論があるものの保護者の一部には地球子屋の学びを学校でも認めてほしいという要望もあることから検討をしていく方向で話を進めている。

### (5) 相談機関

熊本市子ども・若者総合相談センターから依頼を受けて、相談員を対象とした「不登校・ひきこもり」への対応方法の研修を行った。

相談員といつても不登校・ひきこもりについて専門的に学んだ経験はないことから大変好評であった。

### (6) 民生委員・児童委員研修

民生委員・児童委員対象の「不登校の子ども」への対応について研修を行った。

その子の特性や学校の人間関係だけでなく家庭環境も影響するケースが増えている現状を踏まえ、家庭への介入の重要性やその具体的な方法について触れ、連携の重要性を説いた。

実施団体

NPO 法人フリースクール地球子屋

作成者

加藤千尋

連絡先

NPO 法人フリースクール地球子屋

メール [freeschoolterrakoya@gmail.com](mailto:freeschoolterrakoya@gmail.com)

電話 080-4286-2999